

仕事上で大事にしようとしてきたこと

法律事務所職員

川崎 悟

事務所に入所して19年目になる。所内では否応なくベテラン組にカウントされる。入所以来、仕事上で大事にしようとしてきたこと（のほんの一部）を述べたい。

「連帯して」と「各自」の意味

日常的な仕事として訴状提出の準備をすることが多い。手数料を算定するため、訴訟物の価額（訴額）の算定やチェックも行なう。

例えば、よくある請求の趣旨で、「被告らは、連帯して金200万円を支払え」というのがある。この場合の訴額は200万円になる。

それがたまに「被告らは各自金200万円を支払え」というものもある。被告がAとBの2人だとし、文字通り解釈すると、各自200万円支払えというのだから、合計400万円ではないかと思う。しかし、弁護士の起案をみると既に訴額が200万と入っている。ン？と思いながら、請求の理由を読んでみる。そうすると、どうやら請求の金額の合計は200万で、最後の「よって書き」には、請求の趣旨と同様に「被告ABは、各自200万円支払え」とある。私の予想していた合計額の400万ではなかったようだ。でもなんだかこの日本語はおかしいなあと思い、起案した弁護士に聞いてみた。「この表現は、『各自』ではなく『連帯して』の間違いではないですか？」私の指摘に対し、弁護士は、ややむっとした表情で「いや、それでいいんだ」との答えだった。あまり釈然としなかったが、そのまま訴状を提出。何事もなく受理された。事務所に入って2、3年の頃だったと記憶している。

数年して、また同じような訴状に出会う。その時もなにか釈然としないまま作成し、提出した記憶がある。

しかし、同様の訴状と、当然にまた出会うことになる。訴状を提出した後、担当した弁護士ではなく、休憩していた別の弁護士に聞いてみた。「以前から、どうしてこれが『連帯して』ではなく『各自』なのか疑問だった。日本語としておかしくはないですか？」との質問に、「『各自』も『連帯して』も同じ意味だ。原告に対して、被告のAとBが『連帯して』支払っても、単独でAが支払っても、またはBが支払っても、原告にしてみればとにかく払ってもらえばいいわけで、AとBが連帯しようがどうしようが知ったことじゃないわけだ」という回答だった。また別の弁護士は、「いまは、（依頼者などに誤解をまねくから）『各自』はあまり使わない方がいいな」とも答えた。

数年間、釈然としないまま過ごしていたが、やっと、霧が晴れたような気分になった。そして、あながち自分の疑問も捨てたものじゃない、とも思った。

自分の中での再構成

毎日、いろいろなメニューをこなさなければならない中で、疑問な点はいろいろでくる。基本は自分で調べてみることだろう。が、日々の中で思うようにすぐに解決できないこともある。

上の例からも、疑問は大事にしたほうがいいということだ。「各自200万円支払え」の適否はともかくも、自分の頭で理解しなおすことだ。そのためには、自分用のノートやメモに何でも書いておいて、機会あるごとに調べたり、それでもわからなければ調べ方を聞くことだ。最初の疑問や印象が、問題解決の最良の糸口になるように思うし、そして解決を通じて仕事への満足感・一体感につながるように思う。